

口癖は、鼻をつまんで

くるみざわしん

登場人物

佐崎	男	72歳	市民グループ代表
長沢	女	42歳	市民グループ代表
田上	男	23歳	市民グループ代表
山中	男	51歳	市民グループ代表
藤井	男	40歳	雑誌編集者

一景

2016年7月初め、昼過ぎ。

梅雨が明けず、長雨が続く。

今日も朝からシトシトと雨。

都内。駅近のテナントビルの一室。

窓がある。

雑誌社「日本の選択」の会議室。

佐崎と藤井がいる。

佐崎は会議開始の30分も前に来て、イスに座り、藤井から送られた資料を机に広げて読みこんでいる。

藤井はコンビニの白いビニール袋を机に置いた。中にはお茶のペットボトルが5本。もう一方の手に持っていた黒いカバンはすでにイスに置かれている。

（観客には佐崎が机に広げている資料の一部があらかじめ渡されている。「日本政策研究センター」発行の月刊情報誌「明日への選択」2016年9月号に掲載された伊藤哲夫氏の論文の抜粋）

藤井 お早い。佐崎さん。

佐崎 遅れたらいかんでしょ。大事な会議に。

藤井 はいはい。

藤井はビニール袋からペットボトルを取り出し、1本を佐崎に差し出す。

佐崎、受け取り、

佐崎 （受け取り）天下分け目だよ。

藤井 分け目ですか。

佐崎 分け目だよ。（机に広げている資料に目をやり）武

藤先生はこの論文によっていいよ。

藤井 ケリがつきますか。
佐崎 つくね。そこんところ君はピンときとらんようだが。
編集委員なのに、「日本の選択」の。
藤井 すみません。

藤井はペットボトルを机に置いて回る。これから来る
3人の分。

佐崎 ここに来る前はなにやってたの。経済紙。

藤井 いいえ。

佐崎 どっかの小さな出版社。

藤井 いえ、事務を、建設会社で。

佐崎 あ、そう。

藤井 リストラされてまして、こんな日本じゃいけないと思
い、一念発起して「日本の選択」に。

佐崎 じゃ、憲法問題は。

藤井 まだまだ勉強中。

佐崎 無理ないか。武藤先生のこの論文の意味がわからな
くても。（武藤論文に手を置く）

藤井 すみません。

佐崎 勝つよ、我々は。これ（武藤論文）で。

藤井 勝ちますか。

佐崎 勝つ。

佐崎は、ペットボトルを手に取り、窓の外を眺める。

佐崎 いつまで続くんだ、今年の梅雨は。

藤井 ええ。

佐崎 これで二週間、雨だよ。

藤井 ですね。

佐々木、ペットボトルの蓋を開け、お茶を飲む。ゴ
クリと。

佐崎 うまい。

藤井 わかりますか。ちよつとない、特別なお茶でして。

佐崎 だよねこれは。

藤井 はい。

佐崎 ま、いずれ雨もあがり、夏が来る。八月の暑い夏。
輝く太陽。思い出すなあ、あの屈辱。敗戦、占領

の。

藤井 え、生きてらした、その頃。

佐崎 ばか言っちゃいかん。俺は戦後の生まれだよ。教え諭されてきたんだ、父、母、祖父、祖母。四人それぞれ立場からみっちり。あの顔と声と言葉が浮かび上がってくる、八月。あの戦争はアジア解放の戦争だった。大日本帝国でいい。日本は間違っていない。そのことをわかってない連中が多すぎる。

藤井 はあ。

佐崎 聞き飽きたか、この話。

藤井 すみません。ここに入って、八月が来るたびに聞かされますので、正直、うんざり。

佐崎 だよ。昨日もうちのグループの若い子に注意された。「やめてくださいよ。お気持ちはわかりますけど、繰り返し聞かされるの苦痛です。時間の無駄。佐崎さん、左翼はそれで失敗しているんですよ。繰り返すんですか、同じ失敗を。左翼から学びましょう。我々は草の根。国際貢献。郷土、国土への貢献を柱に運動を展開してる。頭固すぎ、佐崎さん。左翼から学び、奴らの失敗を繰り返さない」

藤井

なるほど。

佐崎 若い子から、左翼左翼って言われるとね、黙るしかない。俺、左翼にはなりたくないから、絶対。

藤井

ですよね。

佐崎

わかってくれる、そこ。

藤井

はい。わかりやすいです。で。

佐崎

なに。

藤井 (佐崎の手元の資料を指し) この武藤先生の論文ですけれど。他の方々は御理解していらっしやるんでしょうか、意味。

佐崎 他の方々ってのは。

藤井

今から来る長沢さん、田上君、山中さん。

佐崎

そりゃあ理解しているよ。各地区の市民グループを束ねてこの数年、徹底的に憲法問題に取り組んでいる。この論文の意味は十分にわかる。従来の発想を根本から変える、すさまじい破壊力だ。

藤井

すさまじいですか。

佐崎

でも田上君は反対じゃないかな。

藤井

え。

佐崎 自民党の改憲案の練り上げに尽力してきたんだ、学

生時代から。青春のすべてを自民党改憲草案に注ぎ込んで留年までしたんだよ。うんと言わないよ、武藤論文に。完全無視だもの、武藤先生、田上君のこれまででの仕事を。

藤井 そうなんですか。

佐崎 え。わからないの。君。

藤井 はい。

佐崎 まずいよ、そこはわかつとかないと。

藤井 すみません。

佐崎 地雷踏むよ。今日は議論には口を挟まないほうがいい。爆発して正論を振りかざすからね、田上君。左翼っぽくて良くないって俺が言っても黙らない。でさらに爆発なんだから俺よりたちが悪い。

藤井 ですよね。

佐崎 で、長沢さんは賛成だろうな、ああいう人だから。

藤井 ああいう人。

佐崎 わかるでしょ、ああいう人。

藤井 ええまあ。わかります。

佐崎 認めてるんだよ、俺は。大和撫子とは思わなければ、まあ頭がいいし、いろいろは、鼻をつまんで。

藤井 いえ、彼女、根は従順で大和撫子なんです。そこが人気。

佐崎 そうなの。

藤井 それで弁護士ですよ。あの年であのルックス。グツドルツキングだと自分では思ってるんです。

佐崎 どうでもいいよ、肝心なのは山中だ。

藤井 はい。

佐崎 わからんなあ。元左翼だろ。便利なんだけど、言葉を操るところがある、たいして賢くもないくせに。ですな。

佐崎 いつまでも若いつもりだろうけど新鮮じゃないから、武藤先生のようなホンモノの冴えがない。信者を増やしてオピニオンリーダーになろうとしてるんだよなあ。まあ本が出せれば右でも左でもいいのかもしれない。

藤井 はあ。

佐崎 わかる。山中がそういう奴だって。

藤井 わかりません。

佐崎 便利だね、鼻が悪いと、こういう時。

藤井 はあ。

佐崎 つまむ手間がいらない。適任だよ、編集委員。武藤論文の担当。つまむ鼻がないってのは強い。

藤井 ありがとうございます。

佐崎 誉めてないよ。鼻の利かない編集者なんてよそじゃ役に立たない。

藤井 ですよね。

佐崎 とにかくこの天下分け目、鼻をつまめなかった側が負ける。君がいて心強い。

藤井 本論からそれていませんか。

佐崎 なが。

藤井 改憲、加憲の内容じゃなくて、鼻をつまめるか、つまめないかで勝負が決まるなんて。

佐崎 政治だよ。いいんだ、これで。突き詰めたらいかん。勝つためには。

藤井 でも。

佐崎 君は鼻がきかない分、口が災いするね。突き詰めて、自分の正しさを相手に認めさせないと満足しない左翼の間違いを君も繰り返す気かね。

藤井 …。

佐崎 そうそう、そうやって黙ってなさい。そろそろ来よう、あいつら。

藤井は釈然としない。

ドアが開き、長沢と田上が入る。けたたましく言い合っている。

佐崎は机の書類にすばやく目を落とす。

長沢 戦争は神聖な儀式。

田上 ずれてる、論点が。

長沢 国家のために命を捧げるんです。

田上 集団的自衛権が行使されて自衛官が亡くなって国のために命をささげたことになりませんか。

長沢 なる。

田上 なりません。アメリカの戦争に巻き込まれただけですよ。

長沢 日米同盟です。

田上 別の国ですよ、アメリカと日本は。

長沢 一体です。

田上 向こうはそう思ってます。

長沢 いいんです。それでも。

田上 はあ。

長沢 こちらは召使い、あちらは御主人様。それで、一体なんです。

田上 むちゃくちゃだ。

長沢 むちゃくちゃじゃありません。事実ですよ。

田上 対等であるべきです、国と国の関係は。

長沢 ありません、対等なんて。

田上 それに戦争は儀式じゃない。国家が管理する武力行使です。生も死も国家の管理下。宗教じゃない。儀式だなんて呼び方はやめなさい。自分に酔って死んだり、他の兵士に死ぬのを勧めたりする奴が出たら困る。

長沢 喜んで拍手してくれますよ、みんな。戦争は神聖な儀式だって言うよ。

田上 そんなんだから左翼にバカにされるんだ。

長沢 バカじゃありません。弁護士です。

田上 資格があってもバカはバカでしょ。

長沢 バカじゃない。

田上 ことの起こりはこの論文ですよ。

田上、佐崎が目を落としていた武藤論文を叩く。

佐崎 だいぶ議論が白熱しておられますな。

田上 何ですか、いったい、これ。

佐崎 まあ、ね、定刻ですから、お二人とも座って。

田上 座りますけれどね。

佐崎 そのペットボトル。藤井君がおいしいお茶を。どう。一口。

田上 どうでもいいです。お茶なんて。

田上、座る。長沢も。

佐崎 ご不満かな。武藤先生の。

田上 不満です。大いに。

長沢 山中さんは。

藤井 遅れているみたいですね。

長沢 連絡は。

藤井 いえ。

田上 またかよ。

佐崎 いいよいいよ。始めよう。

藤井 でも。

佐崎 遅れる奴はほつとこう。で、田上君は何が不満なの。

田上 論外です。加憲で九条に自衛隊を明記して乗り切ろうなんて。

長沢 なんでいけないの。

田上 ダメです。

長沢 だからなんで。

田上 これまで積み上げてきた議論が。

佐崎

ああ、ここだね。ええと、武藤論文の、ここ。ここだ。(武藤論文を手に取り、読みあげる)「護憲派が改憲に反対する理由として常に掲げるのは、改憲は憲法が謳う平和、人権、民主主義という普遍的価値を否定するもので、それは戦後日本の歩みそのものを否定するものに他ならない、との主張である。これには様々な点において異論があり、われわれとしては簡単に引き下がれない主張でもあるが、私がここで言いたいのは、むしろ今はこの反論にエネルギーを費やすことを止め、まずはこうした議論を無意味にさせるところから始める、という提案である」。

長沢 ね、今のところ、「こうした議論を無意味にさせる」。これが新しいの。

田上 ごまかしですよ。だってね、ええと(スマホ、あるいはタブレットを取り出して、武藤論文を素早く探し、読み上げる)「我々は憲法の規定には一切触れず、ただ憲法に不足しているところを補うだけの憲法修正、つまり『加憲』なら、反対する理由はないではないかと彼らに問いかけるのだ」。なんですかこれ。

長沢 戦略ですよ、新しい。「改憲」じゃなくて「加憲」。

(何も見ないで諳んじる)「残念ながら今日(こんにち)の国民世論の現状は改憲を支持していない。ここであえて強引に従来の路線を貫こうとするならば、われわれ改憲陣営の分裂を招く。本来ならバラバラであるはずの、現憲法を漠然と「普通の原理」と思っている一般国民を護憲陣営に丸ごと追いやることにもなりかねない。とすれば、ここは一步退き、現行の憲法の規定は当面認めた上で、その補完にできるのが賢明なのではないか」。

佐崎 覚えてるの、長沢さん。

長沢 弁護士です。頭がいいですから、私。

佐崎・田上・藤井 ……

長沢 (諷んじる) 「そうした意味で私はずこの「加憲」として考えるのは例えば、前文に『国家の存立を全力を持って確保し』といった言葉を補うこと。憲法九条に第三項を加え、『但し前項の規定は国際法に基づく自衛のための実力の保持を否定するものではない』といった規定を入れて、自衛隊を明記すること。更には独立章を新たに設け、緊急事態における政府の行動を根拠づけるいわゆる『緊急事態条項』をくわえることなど。現行の憲法それ自体は否定せず、ただそれを補う、という形をとることにより、憲法の平和、人権、民主主義の基礎を一層確かなものにするという発想だ」。

藤井 (手元の資料と読み比べて) あってる、全部。

長沢 (諷んじる) 「もちろん、だからといって護憲派の反対がなくなるというのではない。しかし、こうすれば彼らの反対の大義名分は失われるであろうし、その説得力も目に見えて落ちるのではないかということだ。それだけではない。第一段階としてこのような柔軟な戦略を打ち出せば、公明党との協議は簡単ではないにしても進みやすくなるであろうし、場合によっては護憲派から現実派を誘い出すきっかけとなる可能性もある」。

佐崎 ここだよ、ここ。奴らを分裂、弱体化させるんだ。

長沢 (諷んじる) こんな現実的な発想にすら反対だというなら、もはやそのような頭の固い連中とは一緒に行動できない、と現実派は言いだすかもしれないだ」。

佐崎 いやあ、お見事。(拍手)

長沢 どうも。

田上 間違いを暗記したって意味ありません。

佐崎 間違いないさ。戦略じゃないか、素晴らしい。

田上 武藤先生が勝負に出たのはわかります。改憲戦力が国会で三分の二を超えた。中国と北朝鮮の軍備増強を強調して、ここで護憲派陣営に問う。あいもかわらず「反戦平和」「安保法廃止」「九条守れ」と言い続けるのか。それで日本を守るのか。憲法の条文をそのまま残して新しく書き加えるだけなのに。

反対するのか。

佐崎 そうそう。

田上 でも書き加えたら意味が変わる。
佐崎 何なの田上君。左翼みたい。細かいことごちやごちや。

長沢 そうそう、そこまで考えませんよ、普通。

田上 普通ってなんですか。説明しないでごまかすんですか、また。

長沢 またとはなんです。余分なことはいないだけです。それも戦略。

田上 じゃ、もし、改憲の国民投票で自衛隊明記が否決されたらどうします。

佐崎

え。

田上 国際法に基づく自衛のための戦力の保持が否定される。自衛隊は違憲になってしまいますよ。

佐崎 え、そうなの。

田上 当然。

佐崎 どうなの、長沢さん、そのところは。

長沢 ええと。それはですね。(口ごもる)

田上 弁護士で、頭のいいあなた(長沢)にもわからないような事態に陥りますよ。自衛隊を解散させないと辻褄が合わない。

佐崎 だめだ。そんな。我が国に軍がなくなってしまう。

藤井 軍ですか。

佐崎 軍だよ。軍隊だ。

田上 否決されるかもしれませんが、「加憲」を提案したら。我が軍の存在。

長沢 大丈夫、否決されても。

佐崎 だよね。

長沢 うやむやになります、どうせ。

佐崎 え、うやむや。

田上 うやむやでいいんですか。わが軍の存在が。

佐崎 それは、よくないなあ。

田上 だったら中途半端な加憲じゃなくて。

佐崎 でもね。

長沢 うやむやでいいじゃない。とにかく自衛隊が残れば。

佐崎 そうだそうだ、それでいい。うやむやでも。

田上 ダメです。私がさせません。

佐崎 なに。

田上 これは徹底的に話し合って。

佐崎 話し合うのはいいよ。でも結論は決まっている。国民が否決しても自衛隊は残る。

田上 自衛権が否決されてもですか。

佐崎 集団的自衛権がある。

田上 自衛権が否定されたら集団的自衛権もありません。自衛隊は違憲です。

佐崎 だまれ。左翼。

田上 え。

佐崎 左翼じゃないんだったらもう少し。ねえ、長沢さん、何とか言ってやってよ、こいつ（田上）に。

長沢 いえ、あの。

佐崎 いいの、このままやられっぱなしで。

長沢 いえまあ、何事もうやむやに。

田上 だめです。

長沢 …。（黙らされた）

田上 仮に国民投票で可決されたとしてですよ、加憲で規定された自衛隊が、集団的自衛権を含む自衛隊なのかどうか。ここを明確にしないと。

長沢 明確にしたらいじゃない。集団的自衛権を。

田上 ならばつきり書いてくださいよ。条文に、自衛隊は集団的自衛権を行使しますって。

長沢 それは。（口ごもる）

田上 我々の作った自民党改憲案では自衛隊なんていうあいまいな言い方はしない。はっきり「国防軍」です。そして軍とはなにかを明確に規定している。

長沢 …。（言い返せない）

田上 文民統制、軍法会議を規定して、国防軍関連の法律の整備も定めている。こういうことをしないで、加憲で自衛隊を九条に明記しても、現場の自衛官の方々が困る。「自衛官に肩身の狭い思いをさせられない」と思うなら、ちゃんとした法律の整備が必要。こんなのは（佐崎が机に広げていた武藤論文を掲げ）でまかせです。

長沢 …。（反論できない）

藤井 私がわからないのはですね、総理は「自衛隊を合理化しなければならぬ」って九条加憲の理由を説明してんじゃないですか。でも、現状で合理化の必要があるってことは総理自身が自衛隊の合憲性に疑いを持っていることになりませんか。

田上 あ、なるね。

藤井 なりますよね。

田上 なかなか鋭い、藤井さん。

藤井 いえいえ。前からあの人、辻褄が合わないなって思
ってたんです。

佐崎 ころ。

田上 え。

佐崎 言っちゃいかんだろ、それは。リーダーなんだから、
我々の。多少へんてこでも持ち上げないと。我々は
ひとつ。

藤井 でもですね。

佐崎 分裂するのは向こうだよ。

藤井 それはわかっていますけれど。

佐崎 どうわかってるの。

藤井 それはあの。(口ごもる)

佐崎 これ以上ごちゃごちゃ言うと仕事なくなるよ。

藤井 …。

佐崎 君ひとりぐらいどうにでもなるんだよ。しかるべき
方にお伝えして手を打てば。

藤井 …。

田上 だまることないよ、藤井さん。議論なんだから。自
衛隊の明記以外にもあの人の言ってることはめっちゃ
くちや。

佐崎 黙れ。

田上 緊急事態条項はめっちゃくちやですよ。

佐崎 何がどうめっちゃくちやなの。

田上 我々が作った自民党憲法草案は第九十九条をわざわざ
ざ作って「緊急事態の宣言」について予算、国会承
認、国民の義務を細かく規定している。それでもま
だ足りないぐらいなんです。なのになんですか、こ
の武藤論文の加憲案。想定は自然災害で、議員の任
期延長しか規定していない。緊急事態っていうのは
武力攻撃事態。つまり戦争。大規模自然災害を強調
して緊急事態条項を定めようなんてのはごまかし。
いつ、誰が、どういう状況を、どうやって緊急事態
と認定するのか。それが大切なのにちっとも書いて
ない。結局は総理に権力を集中させて、選挙なしで
延々と総理でいられる。緊急事態宣言の悪用です
よ。

長沢 いいじゃないの。それで。安倍政権が続けば。

田上 はあ。

長沢 ずっと続きますよ、安倍政権。選挙なしで。

佐崎 そうそう。それが目的なんだから。

田上 ダメです。あの人最悪ですけど、あれよりもっと悪いのが出てきたらどうするんです。長沢さんなんか

安倍さん大好きですから、安倍さんと仲の悪い人がのし上がって首相になったら弾圧されますよ。

長沢 まさか。

田上 籠池さんなんか出て来れないですよ、まだ。

長沢 …。

田上 弁護士としてどう思われます。ああいう、安倍さんのやり方。

長沢 仕方ありません。

田上 仕方ないですませていいの。こつち側には我々よりもっともっともつと右がいる。そつちを国民が支持して政権を奪われたら、われわれは左だ。弾圧される。

長沢 そんなことはありません。

田上 どうして。

長沢 ずっと安倍政権が続くんです。

田上 ずっと。

長沢 それしかありません。

田上 佐崎さん、なんとか言ってやって下さいよ、この人（長沢）に。基本が全然わかってない。弁護士なのに。

佐崎 うん、田上君の指摘はもつともだ。これまでの仕事を無視されたら面白くないのも良くわかる。でもね。ここは仲良く。

田上 仲良く。こんな人（長沢）と。

佐崎 鼻をつまんで。

田上 え。

佐崎 つまむでしょ、君も、鼻。臭いものに近づくととき。

田上 つまみますよ。

佐崎 洗い場のシンクにたまった生ゴミを取り出す時とか、つまむ。

田上 はい。

佐崎 あれですよ。あれ。

長沢 私、生ゴミですか。

佐崎 いやいや。長沢さんは田上君にとって生ゴミなだけで、田上君もまた長沢さんにとって生ゴミだ。そう

でしょ。

長沢 ええ、まあ。

田上 生ゴミだと。

佐崎 かくいうこの私も生ゴミ。で、みんなで仲良く鼻をつまむ。こうして、ね。

佐崎、鼻をつまむ。

田上 できませんよ、そんな。

佐崎 どうして。

田上 こんな人（長沢）でも、仲間です。

長沢 え。

田上 僕にはできません。仲間に鼻をつまむなんて、そんな、我々の絆を冒流しています。

佐崎 絆。

田上 僕はつまみません。

長沢 私はつまむけどな、鼻。

田上 …。

長沢 でも胸にグツときた。今の田上さんの一言。

田上 だって仲間でしょ。言い争っても我々は一つの理念のもと、よりよき国を作るための手段であって。

藤井 一つの理念でなんですか。

田上 世界に一つの日本ですよ。古き良き伝統に守られた、皇室を仰ぎ見る日本。世界の中心に咲く花。

長沢 ですよね。

田上 鼻をつまむなんてのはその理念を汚す。

長沢 そうそう。その通り。

佐崎 古いなあ、二人とも。

長沢・田上 古い。

佐崎 左翼みたいって言われちゃう。きっと。

長沢・田上 左翼。

佐崎 理念ばかり振りまわして地に足がついてない。絆で盛り上がるのはかまいませんが、妥協点はどこですか、お二人の。

長沢・田上 …。

佐崎 最後の最後は大喧嘩でしょ。左翼お得意の。

長沢・田上 …。

佐崎 平和がどうこう言っても実は喧嘩が大好きで。文句言って興奮するのがやめられない。一体感にひびが入ったら大騒ぎだ。

長沢・田上 …。

佐崎 鼻をつまむというのは妥協のことですよ。田上君の改憲案では国民投票に勝てない。今は加憲による改憲しかない。田上君が鼻をつまむ時ですよ。

田上 …。

佐崎 それが第一段階。その後も改憲の戦いは続き、第二回、第三回、第四回、少しずつ田上君の案に近づいたらいい。最終目標として掲げるんだ。

藤井 なんだか今の憲法みたいですね。

佐崎 なに。

藤井 そこんとこ攻撃してきたじゃないですか。今の憲法は理想ばかりで現実的じゃない。自民党の憲法草案も同じってことですよ。理想として掲げて、現実的じゃない。

佐崎 藤井君。

藤井 矛盾だ。

佐崎 君は口が災いするね。本当に。

藤井 え。

佐崎 黙ってなさい、この話が終わるまで。

藤井 …。

佐崎 クビだよ、ホントに。

藤井 すみません。

佐崎 ね、田上君。今回は鼻をつまんで。

田上 納得できません。

佐崎 強情だね。

田上 今の藤井さんへの態度もフェアじゃない。佐崎さんがこういう方だとは思いませんでした。

佐崎 なに。

田上 がつかりです。

佐崎 私はずっと負けてきたんだよ。政権は守ったけど、地域、職場の運動では負けっぱなし。「日の丸。君が代。天皇陛下万歳」なんて言ったら、人間じゃないみたいに扱われた。それでも踏ん張ってきたんだ。父母祖父祖母の顔を思い出して歯を食いしばった。理屈だけでは負ける。田上君が古いのは、負け続けた私たちに君が似ているからだよ。

田上 佐崎さん。

佐崎 私と同じ失敗は繰り返さないでくれ。左翼から草の根を学んでようやくここまで来たんだ。頼む。

田上 …。

佐崎 最後のチャンスなんだよ、私にとって、目の黒いうちに憲法を変える。

田上 あんな改憲でいいんですか。

佐崎 かまうもんか。とにかく第一歩だ。

田上 大失敗するかもしれませんよ。

佐崎 勝つ。見込みはある。

田上 あんな改憲。通っても勝ったことになりません。

佐崎 第一歩なんだ。頼む、田上君。鼻をつまんでくれ。

田上 話にならない。

佐崎 ごちやごちや言わないで、鼻を。

田上 お断りします。

佐崎 頼む。私だって青春のすべてを日本を取り戻すためにささげた。この年になるまでずっとだ。今の君よりずーっと長い。その私の願いを。

田上

佐崎 頼む。

佐崎は頭を下げる。

田上はうんと言わない。

長沢は戸惑い、どうしたらいいのか分からない。

藤井が口を開く。

藤井 あの。

佐崎 お前は黙ってる。

藤井 …。

佐崎 田上君、頼む。

佐崎、また頭を下げる。

田上はうんと言わない。

藤井は言いたいことを飲み込んでいる。

長沢はどうしたらいいのかわからない。

山中が来る。

山中 すみません。いろいろ手間取っちゃって。武藤論文の読み込み。(見て) あれ。

藤井 あのね、山中さん。

山中 うん、わかるわかる。

藤井 わかりますか。

山中 この図で、もうばっちり。頭を下げる佐崎さん、腕組みして動かない田上君。おろおろするばかりの

長沢さん。現状だよ、これが我々の。

藤井

現状。

山中 そうそう。この先は佐崎さんが無駄な土下座をする
かしないか。

佐崎 山中君。

山中 はい。

佐崎 遅れてきてそういう言い方は。話も聞かないでわか
ったわかったなんて。

山中 鼻をつまむお話でしょ。

佐崎 え。

山中

武藤先生の論文に佐崎さんと長沢さんは賛成。田上

君は反対。鼻をつまんでくれと佐崎さんが頼みこみ、
田上君は鼻なんかつまめるかと突っぱねる。長沢さ
んはどうしたらいいのかわからない。頭は良くても
上の人にハイハイしてついてゆくだけだ。自分の頭
で考えられない。

藤井

その通りです。だからさっき私は山中さんを待ちま
しょうって言おうとしたのに、佐崎さんが。

佐崎 藤井君。

藤井 口を開いたらクビだって脅すんですよ。

山中

だよ。結局のところ上下関係なんだ、佐崎さん。

佐崎 なに。

山中 若い頃からちっとも変わらない。

佐崎 …。

田上 山中さんはどっちなんですか。

山中

どっちって言うのと。

田上 武藤論文に賛成か、反対か。鼻をつまむのか、つま
まないのか。

山中

武藤論文には賛成。鼻をつまむ。

田上

なに。

佐崎 そうかそうか、そうだったの。

山中

佐崎さん、長沢さんに鼻をつまむ。

佐崎

え。

山中 お二人も私に鼻をつまむ。

佐崎・長沢 …。(ちよつと不満)

山中 そういうことでしょ。

佐崎・長沢 …。

山中 ご不満ですか。

佐崎・長沢 いえいえ。

山中 田上君にももちろん鼻をつまむ。

田上 私はつまみませんよ。できません。仲間に、鼻をつまむなんて。

山中 青臭いんだよ、君は。

田上 え。

山中 臭いの、青く。ぶんぶん臭う。青い臭いが。

田上 …。

山中 その点、僕は佐崎さんの気持ちがよくわかる。若い頃から御苦労されてきたから。僕とは右と左で居場所は違えど。

佐崎 山中君。

山中 僕らは分裂分裂分裂。分裂の歴史ですよ。自分は間違っていない。絶対に正しいと信じて疑わない。気がついてみたら喧嘩喧嘩喧嘩。敵ばかり。自由と平等と平和を求めているはずなのにどこにもない。ささいな違いに目くじらをたてて本質を見極めない。ただ自分が正しいと信じて、失敗から学ばない。うんざりだよ。カルトじゃないか。僕は右も左も大嫌いだ。

長沢 じゃあどうしてこっちにいるんですか。

田上 そうそう、そうですよ。どうして右に。

山中 聞きたい。

長沢 私たちが聞きたいか、聞きたくないかじゃなくて、あなたが自分から言うべき時でしょ、なぜこっちにいるのか。

山中 なるほどねえ。

長沢 なにその言い方。

山中 いけない。

長沢 この際はつきり言わせていただきますけれど、私、山中さんのような方、大嫌いです。

山中 ほほう。

長沢 私、田上さんに鼻はつまめます。つまんでも一緒にいたい。先ほどのお話でますますそう。

田上 長沢さん。

長沢 でも山中さんは嫌。

田上 嫌です。僕も。

山中 なるほど。

佐崎 あのね。

長沢 嫌でしょ、佐崎さんも。

佐崎 そりゃ。そうですよ。今みたいな言い方ね。

佐崎 でも今、私は彼に活躍して欲しいんだ。左から右に
転んだ彼にこそ、力を發揮してもらって。

長沢 あてになりません。こんな人が力を發揮したら。

佐崎 こらえて、長沢さん。

長沢 スパイなんじゃない、この人。

佐崎 長沢さん。

長沢 佐崎さんだって思ってくるくせに。

佐崎 思ってないよ。全然。

長沢 ウソ。

佐崎 ウソじゃない。やめよう。こんな話。

長沢 やめません。今日という今日は。

山中 はつきりさせますか。

長沢 ええ。

田上 スパイでしょ。山中さんは左翼の。

佐崎 ああ、ああ、田上君まで。

山中 がはははは(笑う)。

田上 笑うな。

山中 この僕が。左翼のスパイ。がはははは。

田上 なにおかしい。

山中 負けますよ、私のように左から右に転ぶ人間をはじ
き出せば、国民投票。これからどんどん左から右に
人が流れるのに。ねえ、佐崎さん。

佐崎 ああ。

山中 純血主義に未来はない。僕のような流れ者を受け入
れる度量の広さがあるかないかが勝負を決める、右
も左も。

長沢 じゃ、左に行けばいいでしょう。

田上 どうして右にいるんです。

佐崎 (山中がしゃべろうとするのに割って入り)それは
あれだよ、山中君も結局のところ、日本人だか
ら。

山中 ええ。

佐崎 だよ、やっぱり。日本だよ、根拠は。

長沢 それだけじゃ信用できない。

田上 左の連中だって日本人ですよ、一応。

長沢 日本人のあなた(山中)がどうしてこっちにいるの
か。その根拠を。

山中 それはすねえ。

佐崎 (遮って)やめよう。それをここで言いたてて決裂
したら。

長沢 佐崎さん。

佐崎 取り返しがつかないよ。ここまでせつかくやってきたのに。

田上 白黒つける時です。

佐崎 やめようよ。スパイとか白黒とか。ね、和をもって貴し。曖昧にグレイでいいじゃない。

田上 ダメです。グレイは。

佐崎 もういいよ。憲法も今のままで。私が死んでも君たちが運動を続けていつか日本を取り戻す。それを夢見て死ぬから。

山中 その取り戻す日本が問題なんです。佐崎 は。

山中 どの日本を取り戻すのか。

佐崎 そんなの決まってるじゃないか。

山中 どう決まってるんですか。

佐崎 もういいよ。この話は。

山中 僕がどうしてこっち側にいるのか。

佐崎 わかったわかったもういいから。

山中 この国の人は筋を通して説得なんかされたくない。筋なんか通ってないほうがいいんです。今の佐崎さんの態度ですよ。グレイ。

佐崎 …。

山中 突き詰めて露わにされるつじつまの合わなさ具合に耐えられない。そこを突き詰めないのが人情で、事実そっちのけで義理さえ立てばいい。憲法よりそっちが大事。ムードに酔っぱらって勢いで物事が進むそれが真実だと思ってる。人生を自分で作り上げる気なんかさらさらない。いい流れに乗って注目を集め、お上に目をかけてもらいたい。そういう人間の集まりなんですよ、我々は。ね。皇室を仰ぎ見るくせに対米追従。外から見たらめっちゃくちゃだ。信用できない、こんな国。でも僕たちはそこで生きている。居心地がいい。ここ以外に暮らす場所はない。あきらめるしかないじゃないですか。僕はあきらめてこちら側にいるんです。左の連中はそこところをわかってない。この国の人間がどういう人間かを知らない。結局のところ自分を知らないんだ。うぬぼれている。そんな連中と一緒にいて勝ち目があるわけないでしょう。

田上

山中さん。

山中 私は勝つためにこっちにいる。武藤論文にも鼻をつまむ。田上君にも鼻をつまむ。

田上 …。

山中 左の連中に目にも物を見せてやろうよ。筋が通っているなんて何の価値もない。数取れば勝ちなんだ。

田上 わかりました。

佐崎 え、つまんでくれるの。

田上 つまみますよ。勝つために。自民党憲法草案は草案としていつか必ず憲法に。

佐崎 ありがとう。(山中に) ありがとうね、山中君。これで私。

山中 佐崎さん。

佐崎 ようやく死ぬる。安心して。

田上 では急いで戻って伝えます、私のグループに。武藤論文に賛成して、鼻をつまめと。

佐崎 ありがとう。

長沢 私も行きます。田上さんが賛成だって知ったら、みんな自信持つと思います。

田上 じゃ。

長沢 また。

田上、長沢、去る。

藤井 先ほどの山中さんの発言は文章にしてよろしいですか。

佐崎 え。

藤井 記事にして雑誌に掲載。

佐崎 いや、それは。

山中 やめといてくれるかな。文章にするのは国民投票に勝ってからだ。

藤井 わかりました。

山中 読者座談会は武藤論文に全員一致で賛成。書くのはそこまで。鼻をつまむ件も文書にしないで、口伝えで広めよう。

藤井 そうします。

藤井、何か言いたそうで立ち去らない。

山中 どうした。

藤井 先ほどのお話、胸にすっと落ちました。青臭かった

んですね。私。

佐崎 藤井君。

藤井 すみませんでした。

佐崎 いやいや、私のほうこそ。

藤井 今日の夜までに文章にしますので、いつものチェックを。

佐崎 わかった。

藤井 では。

藤井、去る。

佐崎 続くねえ。雨。

山中 はい。

佐崎 君は出るの、選挙。

山中 ええ、いずれは。

佐崎 国会議員。

山中 はい。

佐崎 するの、さっきの話、選挙演説で。

山中 どうでしょう。

佐崎 言って落ちなかつたら独裁者の誕生だ。君ほど国民を侮辱する男が選ばれたら。

山中 がはははは（笑う）。国民投票の結果を見て決めますよ。僕に勝ち目があるかどうか。

佐崎 なんだかねえ。

山中 なんです。

佐崎 憲法が変わっても先行きは暗いような気がしてきたな。雨はやまないし。

佐崎は窓の外を見る。

山中はペットボトルの蓋を開ける。

佐崎 うまいよ、それ。藤井君、そういうのを見つけるのは得意なんだ。

山中 ええ。

山中、お茶を飲む。

山中 うまい。

佐崎 鼻をつまんだら、おいしくないよな。

山中 え。

佐崎 味がわかんなくなっちゃまう。気がかりなんだ、それが。鼻をつまめと言いながら、なんだかひどく悪いことが起こりそうで。

山中、次の一口が飲めない。
佐崎、自分のお茶を飲む。無理やりにグイッと。

佐崎 鼻をつまんでうまいお茶が飲めるかね。
山中 …。

山中、お茶が飲めない。
佐崎、テーブルに置きっぱなしになって、口をつけられないままのペットボトルのお茶を見る。

佐崎 どうでもいいってことかな。
山中 ですよ。勝てれば。

山中、グイっとお茶を飲む。
佐崎もグイっとお茶を飲む。
そっぽを向く、二人。
溶暗。

—終

参考文献

- 「憲法の岐路」20171024版 学習会資料 田崎基
- 「日本会議とは何か」上杉聰 合同出版
- 「日本会議の全貌」俵義文 花伝社
- 「日本会議の正体」青木理 平凡社新書
- 「日本会議の研究」菅野完 扶桑社新書